先天盲開眼者の視覚世界

鳥居修晃・望月登志子 著
発行 東京大学出版会 A5版
定価 本体5,500円＋税

本書では、角膜や水晶体の疾患のため視覚に障害がある先天盲（出生時に既に失明状態、および、生後数年の間に失明）の視覚障害者が、開眼手術を受けたことによって得られる視覚情報から事物を把握し、知覚していく際の視覚知識の形成過程が系統的に述べられている。

一概に視覚障害者といっても、失明時期により先天盲と後天盲に分けることができる。既に事物の視覚情報の概念が形成されている後天盲者と比べ、先天盲者は触覚や聴覚による知覚しか持ち合わせていないため、触ればすぐに分かれる日用品などの事物も、眼では個物として特定できない。視覚情報を理解するまでには十分な訓練が必要であり、開眼者との長期にわたる「共同実験」を通じて視知覚の謎に迫っている。

その内容は、まず序章で問題の所在と課題をあげ、1, 2章で手術前後の視覚障害状況や視覚体験、および施術前に得ていた保有視覚について述べている。保有視覚の度合いにより、術後の視覚体験の様相が大きく左右されるため、明暗がわかる第I群から2次元の形までわかる第IV群までの新たな分類法を提案している。3, 4, 5章では色、図形、立体の弁別、識別に関する共同実験結果の具体例を詳説している。開眼者が術後最初に知覚する視覚情報は色であるため、取り掛かり易い色に関する実験から、より高度な図形、立体の識別実験と順をって共同実験結果を記載している。立体に関しては視点により見え方が異なる点でかなり困惑するが、逆にそれが3次元対象物の特徴であり、状況に応じて最適な視点探索の必要性の発現を促す1つの契機ともなることなど、興味深い点を記している。また、6, 7章では色などの事物の属性をどのように抽出し、統合して事物の識別をしているかを述べている。後半の8, 9章では前半とは少し異なり、顔の表情や身体など視覚的な非言語的交流行動の成立過程や、自己概念の発達過程を明らかにするための鏡映像の知覚と定義に関して、先行研究のまとめや開眼者との共同実験により得られた結果が記載されており、終章で今後の課題、展望が示されている。

以上のように、本書は開眼手術後の視覚的な弁別、識別活動の能力の開発、形成を系统的に行う際の学習計画の指針として大変有用であると同時に、視知覚の形成過程を理解するものにも適しており、福祉関係者のみならず、視覚情報を研究する人にも一読をお勧めする。

（河井良浩　産業技術総合研究所）